



山口 範雄

味の素
特別顧問



同友洋画会 — 同好の士を求む —

15年来、同友クラブの同友洋画会に参加している。指導は文化功労者・絹谷幸二先生である。もっとも、われわれの趣味としての取り組み姿勢を、先刻承知の先生は「絵でどうにか成りたいわけではないでしょう。好きに描けばいいんですヨ」と、各自の自己流を尊重してくださる。

月2回の練習日に大手町で着衣またはヌードのモデルを囲む。3回の練習日で新しいモデルに変わる。私が参加した頃は

毎回20人ほどの出席者がいたので、それぞれの席が決まるまでが大変だった。最高齢の93歳の方が好みの場所に座り、80代、70代と続いて、最若手のわが席は概ね毎回、3列目の似たような辺りで前の方々の背中の隙間から描くことになる。帰宅後、愚妻から「なんでいつも同じ方向から描くの?」と聞かれ、私は答える——「世の中で生きていくにはいろいろあるの」。

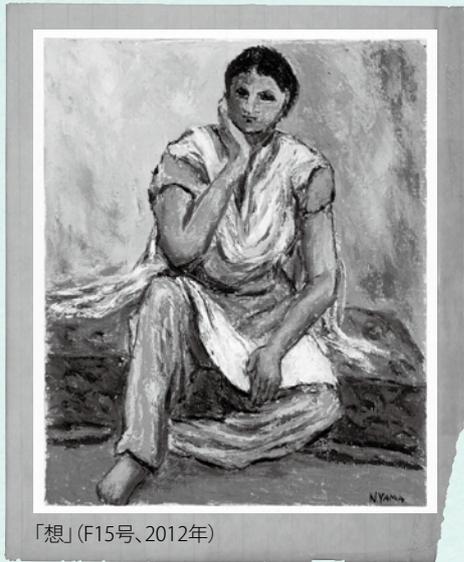
全員が落ち着いて描き始めると間もなくモデルに質問が出る——「キミ、何て名前?」「A子です」。ワテンポおいてもう一人が「君の名前は?」「A子です」。同じ問答がさらに2、3回繰り返され、皆の絵

筆が動き始める。10分ほどたつと窓際から一声——「キミ、何ていうんだっけ?」。モデルさんも馴れたもので「A子で一す」「裾の下はどうなってるの?」——まったく邪心の感じられない単純質問なので、モデルさんも「こうなっています」。

この柔らかな雰囲気と合間に交わされる年輪に裏打ちされた会話のバランスが、他では味わえないもので、「最若手」は黙然と

3時間を満喫していた。

それ以来、退会者や逝去された方があり新入会者が少ないため、最近では出席者が常時6、7人になってしまった。今もって“最若手”であるが、定位置はかつて80代の方々が占めていた好位置で、腕が上がったわけではないが、愚妻からの批判もなくなった。



「想」(F15号、2012年)



同友洋画展で(右が筆者、2017年)



同友洋画展で(右から2番目が筆者、2007年)